

日中戦争日記
第一卷

日中戦争日記

第一卷 杭州湾上陸

村田和志郎



著者略歴



明治三十六年十月
大正十二年三月
昭和三年三月
昭和五年三月
昭和五年十一月
昭和十二年九月
昭和十三年六月
昭和十五年四月
昭和十九年二月

福岡県嘉穂郡碓井村生まれ
福岡県立嘉穂中学校卒業
明治大学法学部独法科卒業
陸軍幹部候補生(短期志願)
陸軍歩兵伍長(予備役編入)
陸軍歩兵第百二十四聯隊所屬
召集、歩兵第百二十四聯隊所屬
陸軍歩兵軍曹
召集解除
臨時召集(将第一四六一部隊、
造第一一四〇部隊、集第一六六
六七部隊等に所屬)
陸軍歩兵曹長
現地召集解除

日中戦争日記 第一卷

昭和五十九年二月二十五日 初版発行

定価千五百円

著者 村田和志郎

発行者 竹内 洋

発行所 鵬和出版
東京都目黒区八雲五―十一―二〇一号
電話(〇三) 七一七―四三三六代
振替口座 東京 八―四九六一九番

製版 印刷 法規書籍印刷株式会社
製本 長崎製本株式会社

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません)

ISBN4-89282-021-0

Printed in Japan

真正なる“戦場の証言”

宇都宮泰長

日中戦争（支那事変）に関する資料、すなわち体験記・手記・証言・記録・文学等を枚挙すればいとまがない。刊行物以外にも恐らく数千、数万点の資料が退蔵されていることであろう。

これらの資料は、悲惨な戦争への道を二度と歩まないために、貴重な国民的遺産として保存し、戦争体験の風化と資料の散逸を防止しなければならない。いずれ近い将来、これらの資料を実証的に検討し、日中戦争のすべてについて、考察すべき機会が得られるのではなからうか。

こうしたことから、永く篋笥きようしに眠っていた「村田和志郎陣中日記」が『日中戦争日記』（全七巻）として刊行されることは、まさに時機を得たものと確信している。

筆者の村田和志郎氏は、日中戦争に下士官として従軍し、その間（昭和十二年九月より昭和十五年四月まで）殆ど毎日、日記を認め続けている。記録することに身命を

かけたといつても過言ではあるまい。その執念にはただただ驚くばかりである。

氏が執念で認めた日記には、国家が隠し続けたいと思う皇軍による虐殺や、中国女性に対する凌辱行為が「ナマの証言」として記録されており、侵略戦争の実態をさめた下士官の目を通して知ることができる。また、日中両軍による宣伝行為、伝單や布告にみられる諜報戦の様相など、苦渋にみちた戦場の空気をよく伝えてくれる。お世辞にも流暢な筆致とはいいい難いが、野戦における記録として客観的記述、中正を失しない点に資料的評価を見い出すのである。

ともかく、日中戦争における日本軍の戦死者五十余万、中国側の犠牲者数百万人ともいわれ、略奪・暴行・虐殺といった日本軍の罪科によって、戦史上類をみない汚点を残したこの戦争が、かつて「聖戦」を呼号して遂行されたことに留意しなければならない。

軍部が「支那事変の特質は、一方に武力戦による旧秩序の破壊があると同時に、一方において新秩序の建設といふ巨大なる努力が戦ひ築かれつつあることにある。皇軍は戦ひつつ建設来た！」（『聖戦四年』陸軍省報道部編）と豪語した日中戦争の欺瞞性について、本書は真正なる「戦場の証言」として評価されよう。

目次

昭和十二年

九月十日	召集	7
九月十三日	入營	8
十月八日	門司乗船・出港	29
十月十日	富江港入港	35
十月二十三日	福江島見聞記	67
十月二十七日	富江港出港・佐世保入港	85
十月三十日	佐世保出港	93
十一月五日	杭州湾上陸	105
十一月九日	楓涇鎮附近の戦闘	123
十一月十一日	楓涇鎮における戦闘詳報	124
十一月十三日	嘉善附近の戦闘	129

十一月十六日 嘉興附近の戦闘……………140

十一月十九日 嘉興入城……………152

十一月二十四日 八里店における捕虜虐殺……………163

十一月二十五日 湖州地区警備……………169

朝鮮人慰安婦……………174

十二月十二日 湖州出發（南京へ向う）……………193

十二月十六日 漂陽より反転、宜興・長興へ……………200

十二月二十四日 富陽附近の戦闘……………207

昭和十三年

一月一日 杭州入城……………219

一月六日 師団主催慰霊祭……………230

一月十一日 賀陽宮入来……………234

一月十三日 慰安婦配当……………239

一月三十一日 慰安所開業……………254

日中戦争日記 第一卷

凡例

一、本書（第一巻）は携帯日記帳一冊、中国製ノート三冊に記された昭和十二年九月十日より昭和十三年一月三十一日までの日記の全文である。

二、内容については、あまりにも個人的な公表をはばかれる箇所は削除した。

三、仮名づかいについては現代仮名づかいに改めたが、文脈から原文のままにしたところがある。

四、誤字脱字、誤記の明らかなものは訂正し、漢字についても現代風に改めた部分がある。（ ）内は戦後、説明として追加したものがある。

五、日付、時刻、体温等については表記を統一した。ただし、引用文についてはそのまま記した部分がある。

六、部隊記号、部隊符号については文字で表記することに統一した。

昭和十二年

九月十日

午前三時十五分、動員電報届く。東京市杉並区上荻窪の自宅にて母、妻、長男、渡辺君を交え記念写真をとる。午後三時、特急「富士」乗車、東京出発。夜十二時、神戸駅ホームに辻さん来会。発信、電報含め十四通。加藤一夫、木村莊太外。

（加藤一夫はクリスチャンで、氏の著書を通じて親しくなり、氏の小雑誌に雑文を寄稿したりしていた。自分が後年、召集解除で東京へ帰ると渋谷で歓迎会を開いてくれた。その席に松前重義氏もいた。元東海大学の学長である。又、木村莊太は彼の有名な木村兄弟の一人で、関東大震災に遭遇し、夕焼雲に心ひかれ、作家生活に見切りをつけて千葉に転住し、農耕に従った。後年、成田図書館長をやらされ、その後、自殺して果てた人である。江渡狭嶺式に小学校へもやらず、自家で自分の子供を教育した人）

九月十一日

正午過ぎ福岡県の生家につく。十二時迄談、宴会。発信、電報二、外九通。

九月十二日

午前三時半、起床、入浴。五時、村社（氏神様）へ参拝。未だ暗い。六時十七分、駅。豪雨の中、村長挨拶。答辞。十時入浴、身体検査、福岡市大名小学校。極楽寺町、藤吉喜八郎家に宿営。電報発信一。

九月十三日

福岡歩兵第二十四聯隊へ行く。小銃の受領、運搬をやる。兵營の革と脂の臭い。軍需品倉庫の前は応召の兵隊で一杯となり、元氣のいい活動が始まった。この日、天気晴朗で気温高く、身体疲れを覚えた。隊へ帰る。松岡久（少尉）、市橋（少尉）に会う。三十二年式軍刀一、銃剣附属品、歩兵銃、彈藥盒、擲彈筒、喇叭、被服、天幕、背囊、下附される。

前日には冬軍衣袴、外套、襦袢、袴下、卷脚絆、軍靴、軍帽がわたり、何れも一定

の場所に集積するのに大童となる。デパートでトラックを運搬用に提供してくれた。

九月十四日 晴

隊は本日、教練を実施。自分は朝より暇。午前中、松尾伍長来、詩を作れという。三篇を与える。午後一時、編成事務所に戦時名簿、考科表をとりに行く。大名町のこの別邸は全く兵隊で一杯である。氏名を一人宛呼び上げる声、各隊から集まった兵隊はきき耳を立てて、その名を一人も聞きもらさじと一心になる。夕刻五時、宿舎に帰る。発信、速達含め四通。内、水守亀之助。

（水守氏は昭和初期の作家で東京牛込のお宅に伺ったのは復員後の或る日のことで、抹茶をいただいた思い出がある。私は陣中日誌のことを話すと出版社に話してみる、原稿を持って来いと言われた。丁度その頃、福岡市、永野民次郎氏の「福岡時事」という小誌にした私の寄稿と中島利一郎先生の文とが掲載された。永野氏とは南支戦線より文通が始まり、復員後まとめた私の原稿を文明社へ依頼されていて手許になかった。そして、中島先生宅で紹介された山上八郎氏は『日本甲冑の新研究』^{かつちゅう}で保険会社員であり乍ら二十八歳で学士院賞を受けた人の原稿が出ることとなり、私の方は虻蜂

取らずに終わった思い出がある。山上八郎といえば、この一家は学者揃いであった。背広の袖口は切れ、名刺はハガキ大のものであった。生涯独身。既に物故された新聞記事を見た。そして中島利一郎先生の令息は御茶の水女子大の教授で、武蔵野についての父君のものが出版されたことからわかった。当時、まだ東大生であった令息とは或る夜、某早大教授を訪ねた帰り、二人でそば屋に寄った思い出がある。

九月十五日

朝、洲崎で教練があり、兵器（銃剣）分配があった。番号は一九三六一九六と言うが如しである。九時、次兄へ電話。激励の言葉、心配せずに行け、生家も東京の家族も心配無用との電話にほろりとする。何も言えなくなり受話器を置いてしまう。

葉書、二十枚を書く。隊名（部隊長名を冠したもの）を知らせる。別に隊号（編成上の数字を冠した正規のもの）があり、これは秘密にして隊名を用いよとの指示があり、この日、漸く知人友人に知らせることが出来た。

（防諜ということは、一般にさして気にしなかったのであるが、軍では既にこの事に就いて、ひどくやかましかった。後、日本でも訳出された「ブラック、チェンバー」

の問題があった。日本の軍事行動——暗号電報を解読して事前に察知し作戦行動を利用する、米諜報機関のやったことである。暗号電報には乱数表を用いるが、数桁の数字で組み合わされていて、これを電文とする。所が専門に研究すると、外国人であり乍ら他国の暗号電報を殆ど完全に解読してしまう。人間の組み立てたものが人間に解けないことはないという考え方から出発して、苦心を重ねて開発した解読方法で、他国の電報泥棒という外にない。然しこれが戦争である。人を殺すことも、秘密をあばくことも戦争の名に於いて許されたのである。世界どの国もそれが常套手段であった）

二階から下の通りを見てみると、西ノ郷の知人らしい人を見かけたので、女中さんに頼むと間違いなくその人で、挨拶に來られた。武田安太郎さんの弟、武田保（二十三歳）さんであった。

午後四時、広場に集合、身分調査。雑囊、飯盒、戦帽、水筒が渡される。他所ではどうものびのびしない。夕食後、寛いでいると本部から呼びに來た。イロハ名簿を作ってくれという。戦時名簿とりには松尾伍長が行く。

九月十六日

発信、石川三四郎他二十一通。石川三四郎と言えば、フランスに永く居た人で、著作も多く、「デ・ナミック」（小説）を出しておられた。自分は氏をその住居に訪れたことがあった。村の水車小屋を買った家で、書物は本棚に一杯詰まっていた。松沢精神病院——芦原將軍がいた病院（京王電車の沿線）の近くで、田園風景の中にあった。武蔵野の風情が感ぜられる所であった。

朝、水鏡八幡宮の脇で全員東方遙拝。簗子小学校で種痘。十時、兵器分配。十三時、兵員受領。種痘から帰って来ると甥が来ていた。一緒にデパート松屋に上がり、虹の松原の上に赤い夕陽を打ち眺め、その絶景に驚いた。そして新刊の『銀座の並木』を貪り読む。この町のよさ、デパートに上があれば海も山も指顧しこの間に展開し、東京の煙と不規則な家並みの代わりに二階建ての瓦屋根が続いて、其の上に澄み切った空が輝いている。この日は松屋へ何回も行った。

出征、誰からも兵隊さん、兵隊さんと親しまれ、敬われ、信頼されて、応召の兵隊は皆、一面、うきうきしているように見えた。勿論、すべてが一生の最後の瞬間となるのかも知れないし、誰もが心の奥底には熱い涙をかくして、あらん限りの尊敬と信

頼を示めてくれているのであろうが、然し嬉しい。

九月十七日

発信一通。八時半、軍旗下賜の勅語奉読式があった。軍旗は聯隊に渡される。面会所開設。テント四、デパートの岩田屋が準備してくれる。女学生二人に千人針を戴く。兵員受領に行く。

部隊編成事務所に松浦友次郎一等兵、太田伍長の二君に初めて会う。

（松浦は小学校時代の級友。同一学級からは自分と二人だけであった。太田は中学時代級友の太田新作君の令弟。その兄は鳥栖に数万坪の鶏舎を作った世界的な鶏の大先生で、アメリカから強く要請があったが、渡米しなかった。子がなく、夫人も死去。この令弟はどこかの戦場で戦死したときいている。やさしい、いい青年であったのに惜しいことをしたものである。松浦は体の頑強な男で心は至って純情そのもの、コックウ牛のような感じがしてそれでいて至って頼もしかったが、戦後死んでしまっている）

九月十八日

兄三人（義兄、吉田陸彦を含めて）宿舎へ来てくれた。持参のウイスキーで乾杯の後デザートで晚餐、出征を祝ってくれた。（この三人も今はこの世の人ではない）

この日、隊では一週間に亙る編成事務、すべて完了。十五人超過となり、留守隊へ編入替えとなる。中にはそのことを残念に思い泣く兵隊があった。無理もない。自分がその当人にならずにすんでよかったと誰もが思ったに違いない。

午前の軍装検査、雨のため中止。補助員、早原伍長、山内伍長、松尾伍長、竹田伍長の努力は大であった。

（早原伍長は敵前上陸九カ月で内地送還。山内伍長は杭州湾敵前上陸戦で戦死。松尾伍長は広東附近の戦争で重傷、内地送還。竹田伍長は昭和十五年七月末日、帰還後一年余りして急逝。よく酒をのみ、大男で極めて磊落な所があった。山内伍長は西南学院高等部卒の計理士で、角のとれた紳士であった）

夜、幹部決定。本部に将校、下士官一同会食。江田准尉、意気極めて軒昂。隊本部の奥座敷、鉦山業N家の本邸、築山に面した一室。幹部が居並んで、九州男児が戦いに臨む覚悟をきめた。夜更けて夫々宿舎へ四散。この邸は洋館一棟一室あり、炊事場